

## 日向国延岡藩内藤充真院の金毘羅参り (1)

神崎直美

## はじめに

本稿は日向国延岡藩(六万石・譜代)の藩主内藤政順夫人であった充真院が、讃岐国仲多度郡の金毘羅(現、香川県琴平町の金刀比羅宮)を参詣したことに付いて検討するものである。金毘羅参りは江戸時代において、伊勢参りや善光寺参りと並ぶ人気のある参拝地である。充真院はその人生において、金毘羅参りに二度、訪れた。初の参詣は文久三年(一八六三)で、二度目は二年後の元治二年(一八六五)である。いずれも江戸・延岡間を旅する途中に立寄っている。

金毘羅は海上の守護神で航海安全や豊漁を祈願することで知られているが、その他にも家内安全・無病息災・病氣平癒など現世利益の神として、近世に全国的規模で庶民・武士など階級を問わず崇敬の対象となり、金毘羅参りが大流行した。

しかも、金毘羅は大名から厚い信仰を寄せられていた。讃岐国の高松藩・丸亀藩・多度津藩では藩主が非公式に参拝したことに加えて、度々家臣を代参させている。他国の諸藩からの代参も多く、内藤家は代参が多い他国の上位二十藩のうち、九番目である<sup>①</sup>。

内藤家及びその家中が、江戸・延岡間を往来する際に、大坂・延岡間は瀬戸内海と豊後水道などの海路を進む。大坂から延岡に行く過程を例にあげると、大坂の河口を出てから瀬戸内海を進みながら金毘羅のある讃岐国を目指し、以後は四国の海岸線を進みながら豊後水道を渡り、豊後国南部を目指し、以後は海岸沿いに南下して日向国の延岡藩領の入り口というべき島野浦に立ち寄って<sup>②</sup>から、延岡の五ヶ瀬川の河口に入り、ここから上陸する。したがって内藤家や家中らにとって、海路の途中に位置している金毘羅は、大坂から延岡へ進む場合は、これからの航海の安全を祈り、延岡から大坂に向かう場合は、これまでの航海を感謝することとなる。いずれにしても、危険を伴う海路の安全を祈ったりお礼をするのに恰好の場所に

位置していた。

なお、内藤家の江戸屋敷では、日頃から定例で複数の寺社に家老を使者として派遣し代参しており、そのうちの一つに江戸の金毘羅——内藤家の上屋敷の斜め前に位置する丸亀藩（京極家）上屋敷内——がある<sup>(3)</sup>。内藤家は金毘羅を厚く信仰していたのである。

充真院は金毘羅を訪れた際に、二度とも詳細に見聞を旅日記に書き留めている。江戸から延岡へ向かう旅の過程で多くの寺社に立ち寄った<sup>(4)</sup>が、一つの参詣地としての記述量は、他の参詣地よりも突出して多い。規模の大きな神社であることが何よりの要因であろうが、充真院が金毘羅で見聞したものがとりわけ興味深かったことの反映でもある。さらに金毘羅に向かう道筋での見聞も豊富であり、充真院の細やかな観察眼と豊かな感情を窺い知ることができる。

そこで、二度の金毘羅参拜の実態を再現しながら、充真院が何を見聞し、とりわけ関心を寄せたのかなどを明らかにしてみたい。検討に際しては、初回の参拜については「五十三次ねむりの合の手」、二度目は「海陸返り咲ことはの手拍子」など、いずれも充真院の旅日記を主な素材とする<sup>(5)</sup>。

(1) 『香川県史』第四巻・通史編・近世Ⅱ（平成元年）の七五八頁の表一〇五「他国諸大名の代参」による。この表によると、内藤家は文化四年（一八〇七）から嘉永四年（一八五二）の間に代参を九回行なっている。さらに、内藤家よりも代参が多い九州の藩は、四位の豊後国杵築藩（松平氏）や五位の豊前国中津藩（奥平氏）、七位の同国臼杵

藩（稲葉氏）である。いずれも参勤交代で江戸に向かう折に領地から船で出発して瀬戸内海を渡るという地理的要因が内藤家と共通している。なお、「他国諸大名の代参」の表は『ふるさと香川の歴史』（香川県史）別編Ⅲ普及版、平成四年）の二二六頁に「讃岐国外諸大名の金毘羅代参」と題して掲載されている。

(2) この行程は明治大学博物館所蔵内藤政道氏寄贈書の「海上の図」（架号（四）その他八八）による。

(3) 丸亀藩は毎月十日に邸内を開き、江戸市民に参拜を許していた。なお、内藤家の江戸屋敷における寺社信仰については、明治大学博物館が所蔵する内藤家文書の一連の「萬覚帳」（架号、第一部・七）に記載がある。

(4) 充真院は江戸・延岡間の旅の途中に数々の寺社を参拜している。その初回の旅で立ち寄った寺社について、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像——「五十三次ねむりの合の手」を素材として——」（2・完）（『城西大学経済経営紀要』第三二巻、平成二十五年）の五一〜四頁で紹介した。さらに、拙著『幕末大名夫人の知的好奇心——日向国延岡藩内藤充真院——』（岩田書院、平成二十八年）の一九七頁でもふれた。なお、初回の旅で参拜した寺社のうち、大坂屋敷に滞在中に丸一日かけた寺社参拜の様子を拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の大坂寺社参詣」（『城西人文研究』第三二巻、平成二十七年）で検討した。その際に参拜した四天王寺と住吉大社は規模の大きい寺社であるが、それらと比較しても金毘羅参りに関する記載量は多い。なお、右に示した拙稿と拙著について以後で注記する際に、「関心と人物像」（2）、「大坂寺社参拜」、前掲拙著と略記する。

(5) 「五十三次ねむりの合の手」と「海陸返り咲ことはの手拍子」は、明治大学博物館編集『内藤家文書・追加目録八 延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』（平成十六年）に翻刻掲載されている。本稿で右の旅日記を引用する際には、明治大学博物館が所蔵する原本（内藤政道氏寄贈書、架号（二）充真院（繁子）関係（I）一一二、一三）と照

合して正誤を正し、便宜的に句点を施した。なお、これら二点の旅日記を本稿で引用する際には、明大翻刻本と略記する。

## 一 金毘羅へ向かう道筋での見聞

充真院が金毘羅を初めて訪れたのは、文久三年五月十五日である。江戸から延岡へ転居する為の旅の三十七日目である。当時六十四歳の高齢である充真院にとって長旅であるが、四月二十四日に大坂にある内藤家の蔵屋敷に到着、しばらく滞在して休息したり大坂見物をして楽しんだ後、五月六日から船で瀬戸内海を進む船旅をはじめた。大坂の河口から出発して、兵庫・明石・赤穂坂出・大多府・多度津などに停泊しながら、船旅の十日目に金毘羅参詣を果たしたのである。大坂屋敷で疲れを癒したとはいえ、船旅が十日目となると再び疲れが溜まる頃と思われる。

金毘羅参りは船から上陸して陸路を進むので、参拝の為に丸一日かかる。金毘羅は延岡に向かう途中に位置するものの、参拝のためにわざわざ赴いたのである。充真院は金毘羅参りに関して「五十三次ねむりの合の手」に六丁も紙面を割いている。なお、充真院は金毘羅を「金毘羅様」「金ひら様」「金毘羅」などと表記している<sup>(1)</sup>。金毘羅大権現と丁寧<sup>(2)</sup>に記してはおらず、通称を用いているが、むしろ当時の人々に親しまれた信仰としての名称を充真院も用いているのである。

充真院一行が金毘羅参りに選んだ経路は、讃岐国の多度津に入港して、金毘羅五街道の一つである多度津街道を通り金毘羅に向かう行程である。一般的には大坂より東から金毘羅参りをする場合は大坂から船で丸亀に入港して丸亀街道を南下して進んだという<sup>(2)</sup>。充真院一行も大坂から海路を進んだので丸亀から入港してもよさそうであるが、多度津に入港している。尤も、多度津は近世後期には「丸亀にも勝る良港」であった<sup>(3)</sup>。

詳しくは、十三日の夕七つ(午後四時頃)に多度津に入港してその日は船中泊しており、十四日も多度津に滞在して仕度に備えた後、十五日に金毘羅に向けて出発した。当初の予定では十四日に金毘羅を参拝するつもりであったが、十三日に多度津に到着するのが予定よりも遅くなった為、十四日を準備の日として、十五日に参拝することにした。これについては、十三日の記録に「明日は金毘羅様へ参詣と思ひし所、おそふ成しまゝ、明日一統支度して、明後早朝よりゆかんと申しぬ」とあることから確認できる<sup>(4)</sup>。

尤も参拝の準備をするのは御供たちなので、充真院は十四日について「何もなし」と一言記したのみである<sup>(5)</sup>。御供の準備とは、金毘羅に参拝に行く日が確定したのでそれを定宿に伝えるに先に出かけた<sup>(6)</sup>り、金毘羅へ向かう陸路は距離があり、いわば小旅行なので、その為に必要な品を準備したのであろう。

充真院の金毘羅参りに同行した具体的な人数は不明である。同行したことが確認できるのは、御里附重役の大泉市右衛門明影と老女

の砂野、小使、駕籠かきとして動員された船子たちなどである。同行しなかったことが確実な者は重役副添格の斎藤儀兵衛智高、その他に花と雪である。斎藤儀兵衛智高は本船の留守番を勤め、花と雪は前日に金毘羅に先行させていた。<sup>(6)</sup>

十五日の金毘羅参りは、船から上陸して金毘羅へ向う街道での見聞も、金毘羅そのものの見聞と共に充真院にとって関心事であった。往復する陸路も小旅行であり、充真院は見聞を詳しく記録した。当日の出発、上陸の様子から以下に順に見てみよう。

幸いにも十五日は朝から天気恵まれた。充真院らはまだ夜が明けぬうちから準備をして出発した。まず、「船に乗て」とあるが、これは本船から小船に乗り換えて上陸したのである。<sup>(7)</sup> なお、充真院は多度津から金毘羅までの距離について、「金毘羅へは四里とのこと」と記しているが、実際には三里(一二キロ)である。いずれにしても距離があるので早く出発して効率の良い一日にしようとしたのである。旧暦のこの時期は、現在の六月中旬に相当するので、一年の中でも日の出が早く、およそ午前四時代には夜明けを迎える。したがって、まだ暗い午前四時代の早い時間帯に出発したのである。

岸に移る小船から充真院は、「日の出之所ゆへ拝し有難て」と日の出を眺めて拜んでいる。<sup>(8)</sup> 海上から見た日の出は、海面が赤々と光輝き格別な美しさであったことだろう。充真院はその風景に心打たれ、さらに当時の人々が有する太陽に対する信仰心により、有難く感じている。

船から上陸した波塘は石段が甚だしく荒れており、足元が悪く危険であった。充真院は「人々に手こしをおしもらひしかと」と、御付に手や腰を押してもらいながら登ろうとした。充真院が旅の過程でこれ程手厚く御付に手助けされるのは初めてである。御付の者に支えてもらったものの、余程足元が悪かったようで、「ずる／＼すへりふみはつしぬれは、水に入と思て」と、もしも石段がすべり足を踏み外したならば、海に落ちてしまうと気がでならなかった。危険な思いをしながらも、「やう／＼とをりて駕籠に入」と、やっとのことで石段を登り用意していた駕籠に乗り込んだ。

ここから駕籠に揺られて金毘羅まで陸路の小旅行が始まった。充真院は駕籠の中から周囲の景色を眺め、まず、町の様子を記している。この町は「大方小倉より来りし袴地・真田、売家多みゆる」と、袴の生地や真田紐を販売する店が沢山あることに目を止めている。充真院はこれらの商品の大体が小倉から船で運ばれてきたことを記している。充真院が興味を持ち、御付に尋ねさせて知ったのである。

さらに進むと農家らしき建物が散在しており、城下であるという。具体的な記述は無いが、この城下とは多度津藩の陣屋の周辺のことである。多度津藩の藩主は京極氏で一万石の外様大名である。三町(三二七m)程進むと松並木が続く、左側には池らしい様子が見えたという。松並木が続くのは、街道として整備された箇所を進んでいるからである。そこから先は田畑や農家が多くあったというので、

街道が農村沿いとなったのである。この付近は「金ひら参の人に行合」と、充真院一行と同じ様に金毘羅参りの人に出会っている。

その後、一里半(六キロ)程進んでから、小休憩をとった。間取りに興味を寄せる充真院は、さっそく休憩した家の造作を観察して書き留めた。「此家は門を人と少し庭有て、座敷へ上れば、八畳計の次も同じ」と、門や庭があることや、八畳間が二部屋続いている様子を確認している。充真院は座敷に上がって休憩をとった。座敷には「脇に窓有て、めの下に田有て、夫にて馬を田に入れて植付の地ならし居もめつらしく」と、窓から外を見るとすぐ下に田が有り、馬を田に入れて田植えに備えて地ならしをしていた。農作業の様子を充真院は珍しく思いながら眺めた。これ程近くで農作業を見ることは、充真院にとって極めて稀な体験だったことだろう。

この家で充真院は「茶杯のみ、いこひし」と、お茶を飲みながら寛いだ。休憩している時に、先日、先に金毘羅参りに出かけた御付の花と雪が休憩に立ち寄ったところに出会った。ここで充真院は思いがけず心魅かれる物を目にした。それは、充真院が通された部屋の隣の部屋に備えていた貼り交ぜ屏風である。充真院はその時の様子を「次の間なる屏風のほりませには何か有哉と見れば」と、具体的に記している。屏風に張ってあった物は、「文晁の蝶の絵、南湖の山水、南峯の人物を初、我しれる歌よみの大人発句いろく名高人多帳有」と当時著名であった谷文晁が描いた蝶の絵、春木南湖の山水画、南峯の人物画などの絵と共に、充真院が知っている著名な

俳諧、さらに様々な有名人の作品が屏風に貼ってあった。絵心があり文学に親しんでいる充真院にとって、心ときめく作者と作品ばかりだったのである。しかも、江戸に住んでいた頃に知った絵師や俳諧師の作品に、遠く離れた旅先で出会えて懐かしさも伴い、一人感動したことであろう。

充真院はその感想を「うれしくて」と率直に表明している。そして、これら数々の作品を「よく書留度は思へ」と、自分の備忘として詳しく書き留めて置きたかった。しかしながら沢山の作品について記録する十分な時間をとることは、金毘羅を目指す予定が控えているので無理であった。「旅にしあれば致かた無過ぬ」と、無念さをかみしめながら断念したのである。あくまでも、金毘羅への参拝が当日の目的なので、一行の主人である充真院の希望であっても、予定外の時間に費やすことはできなかったのである。

休憩を終えて街道を進みながら、充真院は周辺の様子を観察している。周囲は田畑が広がっているが、金毘羅参詣の人々が休憩する為の簡素な茶店が何軒もあったことを目に留めている。「百姓やらん門口によし津をはりて、戸板の上にくたもの・徳りに御酒を人其前に猪口を五ツ・六ツにな(ら)へて有、幾軒も見へ候」と、農家の前に葦簾をかけた簡素な休憩所を設けて、机代わりの戸板の上に果物や御酒を供していたのである。参拝者が多い金毘羅へ向かう街道だからこそ、周辺の農民もこのような商いをしていたのである。庶民向けの簡素な休憩所は、充真院の目に珍しく写ったことだろう。

お酒が好きな充真院らしい着目点といえるかもしれない。

充真院は街道を行く人々にも興味を寄せている。一行の進む反対側から馬に三人乗りをした者たちが充真院一行とすれ違った時のことである。充真院らを見て、急いで除けようとして百姓らが設置した休憩所である葦簾張りの中に入ろうとしたものの、馬に乗っていた為には葦簾に馬上の人がひっかかり、葦簾が落ちて囲いが壊れたうえ、馬が驚いて跳ねるなど大騒ぎとなった。充真院はこの思いがけないハプニングを見て肝を冷やしたようで、「誠にあふなくと思ふ」と心配した心地を記している。

前述したが、充真院一行の金毘羅参りは海路を進む途中であった。江戸から大坂屋敷までは駕籠かきが同行していたが、大坂から延岡までは船を用いるので船子はいるが駕籠かきはいない。「舟中より参詣する事故、駕籠之者もなく」とある。そこで「舟子共をけふは駕籠かきにして行」と、舟子に駕籠を担がせることにした。

船子等は駕籠を担いだ経験が無いので心配がぬぐえない。自信が無く不安な心地を、互いに話している様子を充真院は耳にしている。「其もの、咄しを聞は、かこは一度もかつぎし事はなけれど、先々おとさぬ様に大切にかつき行きへすればよからんと云しを聞き」と、船子たちが駕籠を担いだことは今まで一度も無いけれど、駕籠を落とさないように大切に担いでいけば良いだろうと話し合っていたという。船子たちは、初めての駕籠かきであるうえ、主人である充真院が乗っているので大切に駕籠を落とさないようにしようと思し

いるのである。

この言葉を聞いた充真院は「かわゆそうにも思、又おかしともおもへる由」と、本職ではない仕事を命じられた船子たちを可哀相であると同情しながらも、その会話を愉快にも感じている。愉快に感じた会話は、落とさないようにしようという点であろう。船子たちが言う落とさない対象とは駕籠とも、駕籠に乗り込んでいる充真院のこと、はたまたその両方とも読みとれる。船子たちはおおいに困惑しながらも、その会話からはそこはかとなく可笑しさが滲み出ている。なお、充真院が船子たちを気の毒に思っている様子は、身の低い使用人たちに対しても思いやりの心を寄せる充真院らしい優しさといえよう。

船子たちは「かこかきおほへし小使有しゆへ、おしへく行し」と、駕籠かきを経験したことがある小使に教えられながら進んだのである。駕籠をかくには、中に乗っている人に負担にならぬよう、揺れを抑えるように運ぶなど、こつが必要なのである。

しかし、困った事態が生じた。船子らがかつぐ駕籠に乗っていた充真院は、その後体調に不調をきたしたのである。「かこにゆられし故か、暑に障りしゆへか、気分悪く、とうきして薬杯用ひつ、行」と、原因は駕籠に揺られた為か、または暑さかもしれないが、気分が悪くなり動悸もしたので薬を服用したという。初めての駕籠をかく船子たちなので揺れが殊の外大きく、充真院は不調になったのであろう。

気分が悪くなったものの、葉が直ぐに効を發したようで、それに続く記述は周りの風景を眺めて美しさを愛でる余裕が生じている。その景色は「早苗のうへ渡したる田は青々として詠よく、向に御山みへると知らせうれしく、夜分はさそな螢にても飛てよからんと思ひつゝ」とある。一面に早苗の初々しい緑が広がる田は、清清しく美しかったのであろう、充真院の心を満たし短歌がふっと湧くように詠めたのである。

歌心のある充真院にとって、感動した気持ちを含めて自然に短歌に詠み込めたことは喜びである。そして、目指す金毘羅が中腹に鎮座する象頭山が向こうに見えることを確認しうれしく思いながら、さらに、この場所は夜に螢が舞い飛ぶ情景もとてもすばらしいことだろうと、想像をめぐらせている。暗闇にシルエツトとして見える早苗の間の水面に、螢の光りが映り輝く様子を思い浮かべたのであろう。

美しい風景を堪能した後に、寺で小休憩をとった。この寺の具体的な名称は不明である。寺に入ると充真院は「何か拝す神にても有哉と思ひし所」と、さっそく拝む対象があるだろうかと気にしている。信仰心が厚い充真院らしい。

この寺は僧侶が無住であり町が管理していた。充真院一行が休憩に立ち寄ることは急に決まった為、あらかじめ町側が清掃できず、寺の座敷は荒れ放題であった。その様子は「すわる事もならぬくらひこみたらけ、皆つまたてあるきて」と、腰掛けることも出来ない

程、ごみだらけであり、一行の人々は汚れがつかないように爪先立ちで歩いたという<sup>12)</sup>。そして「たはこ杯のみて、早々立出る」と、煙草を一服しただけで、急いで寺を立ち去ったのである。

大名家の一行にとって、荒れ放題でごみだらけの部屋を目にしたり、さらに不潔な部屋に入室するのは稀な事態であり、非日常の旅とはいえ珍しい経験である。汚さに辟易して早々に立ち去った寺であるが、充真院は庭に石が少しながら配してあったことや、さつきの花が咲いているが、雑草に覆われて他は何も見えなかったと観察した様子を記している。

寺を出てから、再び田に囲まれた道を進んだが、しばらくすると町に近づいてきた。子供に角兵衛獅子の軽業を演じさせて物乞いしている様子や、太鼓を叩いている渡世人などを見ながら進むうちに、金毘羅の近くまで来たらしく、人家が増えて御宮の鰐口の音が響いてきた。「段々近く聞ゆる故うれしく」と鰐口の響く音が次第に近づいて聞こえてくることに充真院は心をときめかせている。

金毘羅の参道沿いの町は「随分家並もよく、いろくの売物も有て賑わひ」と、家並みが整っており商売が繁盛していた。その様子を充真院は「道中筋の宿場よりもよく、何もふしゆうもなさそふにみゆ」と、途中で見かけた街道の宿場と比較して、金毘羅参道の町の方が豊かであると確認している。

金毘羅参道沿いの町で、まず充真院一行は内藤家が定宿としていた桜屋に向った。桜屋は表参道沿いにある宿屋である<sup>13)</sup>。

既に充真院一行が立ち寄ることが連絡されていたので、桜屋の玄関には「延岡定宿」と札が掛けてあった。ここで少し休憩して暑さで疲れた体を休めようとしたが、一階の座敷は人通りが多くて障子を開けにくいので、二階に上り広く風の通る座敷で一息ついてから、いよいよ有望望の金毘羅宮へ参詣に出かけたのである。

- (1) これらの表記は明大翻刻本の以下の簡書にある。「金毘羅様」は六〇頁、「金ひら様」は六三頁、「金毘羅」は六一頁である。
- (2) 『香川県史』第四卷・通史編・近世Ⅱ、五一七頁。
- (3) 注(2)と同書、五二二頁。
- (4) 明大翻刻本、六〇頁。
- (5) 明大翻刻本、六一頁。なお、以後に続く引用は注記無き限り同頁からである。
- (6) 市右衛門と砂野が同行していたことは明大翻刻本の六四頁、小使と船子が同行したことは同書の六二頁、儀兵衛が本船で留守番をしていたことは同書の六四頁、花と雪が前日から金毘羅に先行していたことは同書六一頁に記されている。これらの任務や立場については前掲拙著の一三一〜二頁、一六五頁で紹介した。なお、以下の本文で大泉市右衛門明影と斎藤儀兵衛智高について表記する場合、充真院の記載に従い市右衛門・儀兵衛と通称で示す。
- (7) 出発の際に詳しい描写を欠いているが、金毘羅参りを終えて船に戻る際の記述(明大翻刻本、六七頁)に小船に乗り本船に戻る様子が記されているので、このように推測してよからう。
- (8) 充真院が日の出を目にすると拜んでいることについては、拙稿「関心と人物像」(2)の四六頁、五一頁、前掲拙著の一八七〜八頁、一九四頁で紹介した。

(9) 花と雪が十四日に充真院よりも先に金毘羅に参詣に出かけたことについては、拙稿「関心と人物像」(2)の七頁、前掲拙著の一四九頁で紹介した。

(10) 充真院が引り交ぜ屏風に興味を示した事と、その作品の作者らについては、拙稿「関心と人物像」(2)の四八頁、前掲拙著の一九一〜二頁で紹介した。

(11) 明大翻刻本、六二頁。以下、注記無き限り同頁からの引用である。

(12) 明大翻刻本、六三頁。以下、注記無き限り同頁からの引用である。

(13) 『香川県史』第四卷通史編近世Ⅱの一三七頁に桜屋伝兵衛の宿に関する記述がある。内藤家が定宿にしており、充真院が訪れたのは、まさしくこの宿であろう。なお、この宿は寛保二年(一七四二)には存在していたという。ところで、この定宿について、明大翻刻本の六三頁・六五頁では「栴や」と翻刻している。しかしながら、明治大学博物館が所蔵する「五十三次ねむりの合の手」の原本には「桜や」と記している。さらに、後述する「海陸返り咲ことはの手拍子」では明大翻刻本の一二四頁と一二五頁に「桜や」と翻刻しており、その原本も「桜や」と記してある。すなわち、充真院本人は一貫して「桜」と記しており、「栴」ではないのである。したがって、本稿で明大翻刻本を引用する際、「栴や」の記載は「桜や」と改めて記す。

## 二 初めての金毘羅参り

金毘羅に参詣するにはひたすら坂道を登ることとなる。象頭山の入り口は「初の御坂は五間もあらん」と充真院が記していることによると坂道が五間(九〇〇m)あり、次に石段が幾折も続いていた。<sup>(1)</sup> 充真院はまず、坂道の足場の悪さに閉口した。この坂道は登り坂で



あり「御山口の坂は、足場悪くてする／＼とすへり、そうりぬけさるやういろ／＼やう／＼人々にたすけられ」と、足元がすべりやすいため草履が脱げないように御付に補助してもらいながら登り始めた。すべりやすい坂道を苦勞して登ることは、高齢である充真院にとって負担が大きかった。「用意に薬水持しをのみ、やすみ／＼と」と、途中で準備していた水を飲んだり、立ち止まったりしながら進んだのである。

坂道を登りきると次は石段が続く。「石段之高き坂いくつも有て」と、充真院は幾折にも続く石段を見上げている。石段を登り進めるうちに、充真院は体調が悪くなってきた。「行程々につけて気分悪く、とうきしけれど」と、気分が悪くなり、動悸までするようになってきた。高齢であることに加えて、大名家の女性たちは長い距離を歩くことに慣れていない。その上、金毘羅へ向かう参道はひたすら登り坂が続くのである。しかも、この日は陽気が暑かった。充真院が具合が悪くなったのは、無理もないことであろう。しかしながら「こゝ迄参詣せしに上らんも残念と思ひ」と、せっかくなこ迄やってきておきながら断念して参詣しないのは残念であると思ひ、体調不良を我慢して石段を登ったのである。

そして「かの鰐口有し御堂の前には青貝の鳥居有」と、参道から遠く響いていた鰐口がある御堂の前の青貝の鳥居の所まで、ようやくたどりついたのである。この鳥居とは、現在の桜馬場西詰銅鳥居のことであろう。鳥居は「近比納りし由にて、誠に／＼ひか／＼し

て有り」と、充真院が参拝した近年に奉納されており、新品であるためびかびかと光り輝いて見事であった。

しかしながら既に充真院は疲れ切っていた。体力が限界に近くなつており、「生もたへなんと思ひ、死ひやうくるしく成」と、息が出来なく成りそうな程であり、死んでしまふのではないかと思われる程苦しかったのである。そこで「さあらは急にも及ぬる故、少し休て上る方よし」と、急ぐ必要はないので少し休憩してから登ろうということになり、「とうろうの台石にこしかけ休居」と灯籠の台座の石に腰掛けてひとこちつくまで休むことにしたのである。

休憩している折に、盲目の人が杖にすがりながら降りてくる様子を目にした。体が不自由な人も信心を持って参拝しているのに、このまま疲れたからといって引き返すのは「残念、気分悪く」と充真院は思った。そして「御宮前にて死度と思、行かねしはよく／＼はち当りし人といわれんも恥しくて、参らぬ印に気分悪と思へは猶々おそろしく」というように、死ぬのなら御宮に参拝してから死にたい、参拝しなければ本当に罰当たりであると人に言われるのは恥ずかしい、参拝せずに気分が悪いというのは尚更畏れ多いと、思いをめぐらせた。この思いには当時の人々ならではの信仰心の深さや、恥の意識などが窺われる。

充真院は奮起した。「夫より、ひと度は拜し度と氣をはり」と、とにかく一度は参拝しようと固く決意したのである。そして「又々幾段ともなく登り」と続く石段を頑張つて登り続けたのである。努

力の甲斐あり、充真院は御堂——本堂——にたどりついた。もはや「御堂の脇に上る比は、めもくらみ少しいきつきて」と、本堂に到着する頃には目が眩み息が少し荒くなっていた。それでも「御堂のわきなる上り段より上りて拝しけれ」と、本堂の横の階段から本堂に上がり拝んだのである<sup>(2)</sup>。

本堂を参拝した折に、充真院は御内陣を自らの目で確認しようとしている。その様子は「目悪く御内神(神)はいとくろうしてよくも拝しかねしおり、やうく少し心落付しかは薄く見へ、うれしく」と、日頃から目が悪いことに加えて本堂内が暗いのでよく見えなかったが、心が落ちついてからは薄っすらと見えたという<sup>(3)</sup>。目が暗さに慣れたからであろう。薄く見えたのではあるが、充真院はうれしく思ったのである。

そして「御守うけ度、又所々様へも上度候へ共」と、お守を授与されたり、他の御堂にも上がって拝みたいと思っただけで、「右様成事にて、只々心にて思へる計にて御宮をおりぬ」と、疲れが甚だしく、さらに目の具合も悪いので、希望は心に留め置いて、本堂を退出して下山することにしたのである。

無理を押しして本堂までたどり着いた充真院を、御付の者たちはたいへん心配していた。その様子は「皆は私気分悪きにて、御守戴事も忘て気をもみ居計との事」とあるように、御付は充真院を心配するあまり、充真院が入手しなかった御守を手配することを忘れてしまった。充真院は御守を手に入れられなかったことを後に残念に思っ

たと記しているが、御付にしてみれば大切な主人の一大事である。下山する時も「今来りし石段を、又人々にたすけられつゝおりて」と、御付に助けられながらやつのことで石段を降りたのである。石段を降りる途中に観音堂がある。案内の人から観音堂に上がって拝むかと聞かれたが、「気分悪く上るもめんとう」なので外から拝んだ。苦しいながらも、外から拝んでいるところは充真院の信心深さゆえである。

充真院が御付に助けられながら下山している様子は「余りくるしそうに見へし」という様子であったため、当寺側が知るところとなった。僧侶が充真院らのところにやってきて、本坊にあがって休憩するよう勧めてくれたので、好意に甘えることとした。その様子は「本坊へ立寄休よと僧の来たりて、いひしまゝしたかひて行し所」とある。

本坊とは金光院のことである。当時の住職は宥常である<sup>(4)</sup>。充真院は金光院側が休憩するために提供してくれた奥の座敷に移動する際に、途中で通過した部屋や周囲の様子などを、体調がすぐれないにも関わらず、実に具に観察していたことが、詳しい記述と挿絵(図1)から窺われる。

まず、玄関について「りっは成門有て、玄関には紫なる幕を張、一間計の石段を上り」と記し、挿絵として玄関先の造り石段、幕、その横の躑躅の植え込みと塀を描いている。挿絵には「何れもうろ覚ながら書」と添え書きをしているが、後に思い出してしたためた

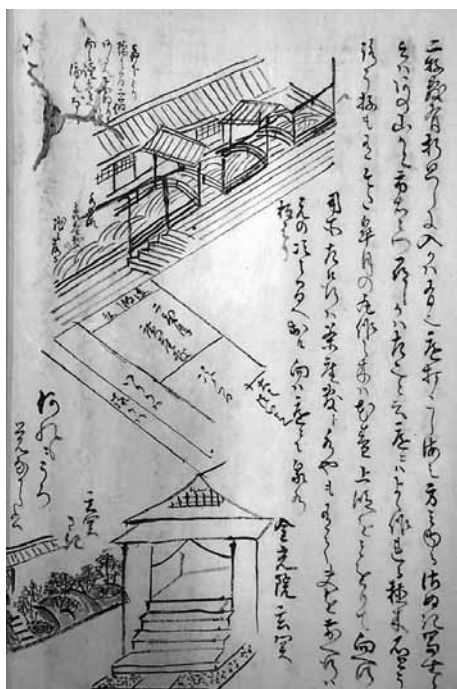


図1

とはいえ、的確に描写している。<sup>(5)</sup>金光院の玄関に僧侶らが充真院を出迎えてくれた。

そこから一間(一八〇糎)程の高さの箱段を上り、次に右に進み、さらに左に進むと一間半(二七〇糎)程の箱段を上がると書院らしい広い座敷があるところの入側を進む。この右へ廻ると庭があり少し流れもあり、植木もあり、向こう側では普請をしている。

充真院はここで休むのかと思ったが、さらに奥に案内されたところ、釣簾の下がる書院があった。書院には次の間と広座敷があり、広座敷には床の間と違棚があった。さらに入端の奥から縁に出て右に曲がると箱段がある。ここを上り折れて進むと、板張りの廊下があり直ぐ横の二間(三六〇糎)程の細長い庭のところに小さな流れ

があり、朱塗りの橋が二つ架けてあった。この流れは、表座敷に面した庭に注いでいた。<sup>(6)</sup>その向いに立派な経堂があった。さらに段を上り奥へと導かれ、十二畳程の座敷も通り過ぎ、ようやく休憩の為に提供された部屋にたどり着いた。

その部屋は大きな衝立や台子の有る上座敷で、「立三間、横二間も座敷金はり付、其上之間之中しきりにはみすも掛け」、すなわち縦は三間(五四〇糎)、横が二間(三六〇糎)の広さで、周囲を金箔で装飾した豪華な部屋で、座敷の中仕切りとして御簾をかけてあった。その隣の上座敷にも釣簾が掛り、畳が二枚敷いてあった。その部屋の向こうには入側があり、隣接して庭が広がり、さらに讃岐富士が借景として美しく見えた。「庭打ちし、海之方みゆる、さぬき富士と云はあの山かと市右衛門尋しかは、左也と云」と、庭に出て海の方を眺めると山が見えたので、市右衛門があこの山は讃岐富士かと寺の者に尋ねたところ、その通りであるということだった。

庭にはよく手入れを施した植木や石灯籠が配してあった。丸い形に整えた五月躑躅は折しも花盛りであった。上段を通りその向こうは用所、左側に行くと茶座敷と水屋が設けてある。それをさらに行くくと元の次の間があり、向いに泉水や築山がある庭があったという。

このように充真院は部屋に通されてから、まずは周囲を珍しそうに見ており、すぐさま体を横たえて休んだのではない。好奇心旺盛な性格も一因しているようだが、何よりも充真院の体調不良は一過性のものであったからだろう。高齢であることに加えて、当日の蒸し暑

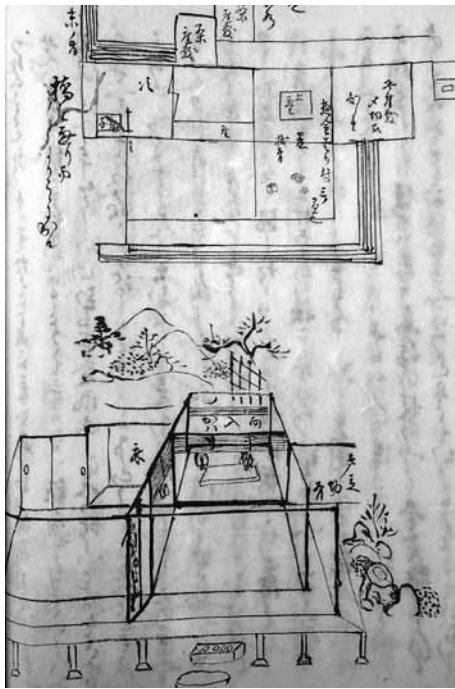


図2

さ、乗り心地の良くない駕籠、長く続く石段を登り疲れ切ったことなど、悪条件が重なった故である。

充真院は周囲を見た後に「座に付は、茶・たはこ盆(出)し候」と、ようやく部屋に座り、金光院側が出してくれた茶や煙草で一服した。茶を飲み煙草を吸って一息ついてから、「気分悪く少し休居候」と体を横たえて休息をとることにした。「枕とて、もふせんに奉書紙をまきて出し候まゝ、よくも気が付て趣向出来候とわらひぬ」と、金光院側が枕に使うようにと毛氈をおそらく巻くか畳んで、奉書紙をかけて整えたものが用意してあるのを見て、充真院は良く気がついてくれたうえ趣向があると、うれしく愉快に感じ笑っている。さらに、「ねりやうかんと干くわし出し候、至て宜敷風味之由」

と、練り羊羹と干菓子も用意してくれてあり、たいへん美味しかったと感想を述べている。<sup>(7)</sup> 疲れ果てた体に甘いお菓子は格別においしく感じたのであろう。

図2は充真院が描いた休憩した部屋の挿絵である。上部は通された部屋とその周囲の間取り図で、下部は休憩した部屋を吹き抜け屋台の視点で立体的に描いたものである。<sup>(8)</sup> 間取りは充真院の関心事であるが、体調不良にも関わらず見事に描いている。この二種類に描き分けた挿絵により、充真院が休んだ部屋の様子がとても良くわかる。加えて、充真院の記憶力が優れていること、さらに歩きながら見た場所について図に描きおこす能力が秀逸であることが窺われる。

なお、間取り図には充真院が休憩した際に金光院側が用意した茶碗や菓子皿、煙草盆らしき物が描かれている様子が何ともほほえましい。

充真院が休憩している間に「八ッ比」、すなわち現在の午後二時頃になってしまった。御付の者たちは、充真院が体調不良となり、その対応に追われた為、昼食を摂る機会を逸していた。そこで充真院は「皆々かわり／＼に下山してたへん」「そのうちには私もよからん」と、御付たちに交代しながら下山して食事を摂るように勧め、その間に自分も元氣になっているだろうと言った。

しばらくして充真院は気分が良くなったので、桜屋に戻ることもなった。夕方までには気分がすっかり快復するであろうと思いい、金光院の門前に駕籠を待機させることにした。座敷から退出して、先

に来た通路や座敷を同じく戻り駕籠に乗って下山した。下山に際しては、「少し道かわり候哉、石段もなく、初之たらく上りの坂に出、桜やに行く」とあるので、上り坂から見て左側(西側)にある坂道を下って、桜屋に向ったのである。

桜屋に到着した充真院は、それまで張り詰めていた気持ち之急に緩んだのであろう、「二階にてふし」と桜屋の二階でとうとうぐったりと横になったのである。充真院が横たわっているものの、「鉢・肴・御酒・くわし・二汁五さいの膳、其外いろく出させ候へとも一口もたへず」と、桜屋は豪華な料理を供してくれた。残念ながら充真院は御馳走を一口も食べられなかった。「かやうに丁寧ならすともよさそな」と充真院が御付に言ったところ、御馳走が用意されるのは先例であるという返答であった。

なお、桜屋の料理は「誰参り候ても二度と一色の品は出さぬよし、十日くらひは違たるもの出す」と、どのようなお客に対しても同じ品の料理は出さないこと、つまり十日ぐらひは違う品を供する心配りをしていることを充真院は知り書き留めた。桜屋は徹底した営業努力をしていたのである。そのような方針だからこそ、大名家の一行が利用するにふさわしいと認められ、定宿となったのである。

しばらくすると、「寺よりも使者来り、参詣の悦いふて、金玉糖もらひ候」と、金毘羅から桜屋に使者が到来して、充真院らが参拝に訪れたことに対して御札の挨拶を伝え、金玉糖を土産として届けてくれたのである。

夕方になり暑さが少し和らいだ七つ半(午後五時頃)前に桜屋を出発して、往路を戻ることにした。復路で充真院らしき——前向きで明るい性格や、御付の者をわずらわせないようにする心遣い——が窺われる一幕があった。<sup>(10)</sup>それは以下の通りである。

「日入比に田の畔に野立しければ、茶をたへんと思て」と、途中で日が沈む頃に野外で休憩する際に茶を飲むつもりであった。茶を飲むとあるが、実は薬を服用するつもりであった。その用意として「小やかんに水入てよく包、駕籠のわきに置しかと」と、小さい薬缶に水を汲んでこぼれないように包み充真院が乗っている駕籠の脇に置いていたが、「ゆれる度に口よりひよこく水出て、あたりは皆ぬれし儘、薬どころにもなく、其しまつにて大こまり」と、駕籠が揺れるたびに水が薬缶の口から出て周囲が水浸しになり、薬を飲むどころではなく、そのこぼれた水を片付けることにおおいに困ったのである。そこで充真院は、「夫よりやかんの口にせんして、手ぬくひを火入にて干杯し、夫を敷てこぼれぬかたわらに置」と、中の水がこぼれないように薬缶の口に栓をして、濡れた手拭を駕籠の中に持ち込んでいた火入れで乾かして薬缶の下に敷いたのである。

一見、肅々と進む駕籠の中で、実は充真院はこぼれ出る水の処理に、一人あたふたしていたのである。「大こまり」とあるように、充真院はこの事態にたいへん困ったものの、処理が済むと「独狂言おかしく」と、一人で大慌てしたことを可笑しがっている。思いがけない事態が生じて、不平に思わず面白がる前向きな姿勢は、充

真院の長所である。

しかも、水が薬缶の口から出てくる様子を「ひよこく」とユーモラスに表現している。この表現も、ささやかなことにも注目して面白さを感じる充真院の観察眼がもたらす産物といえよう。そして、困ったことがあっても、それを旅の一つの出来事として楽しむ姿勢の現われでもある。充真院が旅を愉快的体験として楽しむようとしているからとも言えよう。

この姿勢は充真院が十返舎一九著の『膝栗毛』、いわゆる『東海道中膝栗毛』を読んでいたことによる影響と思われる<sup>(1)</sup>。充真院は弥次郎兵衛と喜太八の珍道中を楽しく読み、自らの旅にも愉快なことを見出そうと心がけているのであろう。旅中でおきた思いがけない困ったことを、くよくよと悩むのではなく、むしろ笑いの種に出会ったとらえて楽しむ心地なのである。

充真院は自らの旅も『膝栗毛』のように「可笑しさ」を見出すことにより、旅の主人公となっているのである。そういう意味でみると、この「五十三次ねむりの合の手」は、充真院にとって、『膝栗毛』を意識してしたためたもので、いわば充真院版『膝栗毛』と位置づけられるのではなからうか。なお、平常の生活とは異なり困難や不快適さを伴う旅を乗り切るにあたり、困ったことから面白さを見出して笑いに感じる充真院の心はしなやかさと逞しさを兼ね備えており、充真院の人間的魅力といえよう。

そして、駕籠の側に付き従っている者たちが駕籠の中の気配を

「何をすと思わん」、すなわち駕籠の中で何をしているのかといふかしく思っただろうと察してもいる。決して騒いで御付に処理させたりせず、自分で出来ることは自力で解決するのである。充真院は、常に御付の手を煩わせないことを心がけていたのである。これは、身分の高い者としての矜持であり、部下たちに対する優しい心遣いでもある。充真院は御付にとって配慮のある良き主人であった事実が、ここからも窺えよう。

その後、往路で休憩した無住の寺に着いた頃は「人貌もやうく見ゆるくらひ」と、辺りがかなり暗くなったので、ここで休憩することは中止して帰路を進んだ。前述したが、往路で充真院は田が広がる景色に感動して、夜に蛍が飛ぶ様がすばらしいだろうと思いを巡らせた。幸いにも復路で、その思いを現実として目の当たりにする機会を得た。「段々暮行まゝ、初思ひし田面には、蛍飛かふさま」と、進む毎に暗さが増して、行きに蛍が飛ぶ様子を想像した田で、まさしく蛍が飛びかう情景を見ることができたのである。田の水面が見える所に蛍の光りが映りこみながら揺れて、その美しさはこの上なかっただろう。さらに「夫に十五日の事故、月もよくてあらわに見へ」と、折しも十五夜で満月が空に姿を現したのである。満月の輝きと蛍の舞い飛び、田の水面に映りこむ蛍の光は、美しさで充真院の心を満たすと共に、「猶淋しく心ほそふ」と旅愁を催した。

往路の最初に休憩した茶屋には、六ツ半(午後七時)頃に着き、少し休憩してから出発した。充真院は駕籠から外を眺め、「月もよ

く遠山の姿もありく〜と見へ」と、満月と遠くに見える山を眺めている。夜道を進みながら、充真院は心細さも感じていたようで、「皆の声すると近くに居哉と嬉しく」と、一行の者たちの声が聞こえると、近くに居ると感じて嬉しく思っている。

駕籠に揺られながら、充真院は本日の体調不良の原因について思案している。その原因として、「けふの暑さと、かこにゆられしと、色々にて気分も悪く成しならん」と、暑さと駕籠の揺れを挙げている。旧暦の五月十六日は、現在の六月末から七月初め頃の陽気で蒸し暑さが増している。しかも、駕籠をかけた経験が無い船子たちが、その場でこつを即席に指導されて充真院の駕籠を担いだので、揺れが大きくて充真院の体にこたえたのであろう。日頃から充真院は「いつもあつさきらひには候へとも」と暑さに弱かったものの、「此様成事は初て、ふしき成ると思ひ」と、未だかつて体験したことがない体調不良だったのである。悪条件が重なったものの、充真院にとっては不思議に思う程、異例な体調の悪さを、「今日は死ひやう思ひしに」と、死んでしまおうかと思つたと感想を記している。

それでも体調不良をおして「滞なく参詣せられしを有難思のみにて」と、金毘羅参りを果たせてありがたいと感謝の気持ちを心に抱いている。辛かった気持ちを思い出して心がつぶれそうになるのではなく、辛さを思い出しながらも、参拝できたという結果をよしとして、感謝の気持ちに転換する充真院の心持の強さと前向きさを、ここでも確認できる。

潮の変化の為、朝とは異なり町の港から船で内藤家の本船に戻った。本船に戻ると、留守番として待っていた儀兵衛が充真院に、「けふは風も有涼しくて宜敷御参詣」と声をかけた。港は風が吹いて涼しかったので、儀兵衛は充真院が気分良く金毘羅参りを楽しんだものと想像していたのである。それに対して充真院は「暑くて気分悪く、よふ〜の事にて行」と、私の方は暑さで気分が悪くなり、やつのことで金毘羅参りに行った旨、返答している。主人と御付との微笑ましい会話である。

充真院は儀兵衛に気分が悪くなった原因として暑さを伝えたが、一方、駕籠の揺れについては一言もふれていない。充真院の船子たちに対する思いやりの表れといえよう。さらに熟練した駕籠かきを同行させていなかったことは御付の不備となるので、事立てしないように自らの心の中に留め置いたのである。充真院が常に御付たちにさりげなく配慮する、心優しい主人だったからであろう。

充真院は船に戻った気持ちを、「先々帰られてうれしく」と、まずは帰ることができてうれしいと記している。しかしながら、ほっと安心して疲れがどっと出たようである。「直に打ふし」と、船に戻ると直に体を横たえたのである。過度の疲れは食物を口に出来ない程で、「持帰りがたへよといゝぬる物も、一口もたへかね知らず」と、桜屋で持ち帰り用に包んでもらった御馳走を全くうけ付けなかった。充真院はとても疲れてしまい、翌日の予定について珍しく希望を御付に申し出た。「明日は気分悪く、夜辺よりの舟出は見合くれ

よといひ置ぬ」と、疲れて気分が悪いので、翌日は夜に舟で移動することは見合わせてほしいと伝えたのである。

このように、充真院は初めての金毘羅参りを体調不良に悩まされながらも、果たすことができたのである。

- (1) 明大翻刻本、六三頁。以下、注記無き限り同頁からの引用である。
- (2) 明大翻刻本、六三〜四頁。
- (3) 明大翻刻本、六四頁。以下、注記無き限り同頁からの引用である。
- (4) 宥常については、『香川県史』第三卷通史編近世Ⅰ(平成元年)六〇〇〜一頁で紹介されている。当時、二十四歳の若き住職である。
- (5) 金光院の玄関の挿絵と添え書きは明大翻刻本、六五頁。なお、現在も玄関に至る向って左側に五月躑躅が植えられている。
- (6) 二つの朱塗りの橋は、現在は塗装が剥落して白木の状態であるが、形状が太鼓橋である様子は充真院が目にした頃と同じである。
- (7) 明大翻刻本、六五頁。以下、注記無き限り同頁からの引用である。
- (8) 明大翻刻本、六六頁。
- (9) 明大翻刻本、六七頁。以後、注記無き限り同頁からの引用である。
- (10) 充真院の前向きで気配りのある人柄については、前掲拙著の二〇一頁でふれている。
- (11) 充真院が『膝栗毛』をこの旅に出る以前に読んでいたことは、拙稿「関心と人物像」(2)の四九頁、前掲拙著一九三頁でふれている。

(次稿(二)に続く)